

モンスター家族に  
ならないために

原題『家庭習慣の教えを論ず』

読みやすさ重視

現代語訳、登場！

おうちで  
どうとくをまなひましょ



原作：福澤諭吉

訳した人：神無月 やよい

こんにちは。

この度は当作品をダウンロードして頂き、ありがとうございます！

諭吉氏の論説、現代語訳の第二弾です。

前作同様、ユーモアたっぷり入れて氏の言わんとしている内容を分かりやすくアレンジしました。

今回のお話は、お子さんに対するしつけの大切さを説いています。

子供は親の背中を見て育つから、日頃から行いに気を配れ。そんなお話です。

現代でも十分通じる育児指南書かもしれません。

前作のような注釈や解説は、特に必要とする部分を感じなかったので、付け加えておりません。

※一万円札の方は相変わらず、やや上から目線口調で、毒舌ではありますケドネ……。

前作読まれた方なら、ほぼ同じ内容を読んでもつまらないだろう。

そう思い、人物や時代背景などの紹介は付録扱いにしました。

なので、今回から軽い解説を本編入る前のこちらに記載致します。

前作の『肉食の説』から六年後の明治九年に、こちらのお話は発表されました。

現在では、子供達がランドセルを背負って、学校に登校する風景が当たり前です。

しかし、当時は学校に行くよりも家業（農家や畜産）を手伝って欲しい。

そう考える親御さんが大半でした。別の論説でその辺の事情をもう少し詳しく<sup>おっしゃ</sup>仰られています。

ご興味ある方は、ぜひ青空文庫の[小学教育の事](#)を一読なさって下さい。

また、第二次世界大戦という名前で知られている。大東亜戦争が始まるまでの日本の学校では、

『修身』という名前で道徳の授業が行われていました。

終戦後、その授業が姿を消してから数十年が経過しました……。

結果どうなったのでしょうか？

私自身を含めた日本国民全体の著しいモラル低下を感じています。

例えば、学校の授業参観や運動会などの行事での父兄参観。

我が子やお孫さんの勇姿をデジカメに写すのに夢中で、他の父兄さんを邪魔しているのに気づかず、大声で声援を送っている。

知らず他の方へご迷惑をかけてしまった。そんな心当たりありませんか？

もしくはスーパーなど買い物した時など、子供が店内を自由に走り回り、販売している商品を倒して、親子ともども逃亡する。

売り物をその場で食べて、何食わぬ顔で元に戻る。なんてもっと斜め上に行くお子さんもいらっしゃる話を聞きます……。

いずれも目を疑う言動です。

もしかしたら、福沢諭吉氏はこのような方々がいずれ現れるのを既に予見されていたのかもしれませんが。

せめて、他人様にご迷惑かけずにひっそり暮らしていこう。

少なくとも、私はこの論説を訳してそう思いました。

それでは、どうぞ本編をお楽しみ下さい！

感想や次回作などのリクエストを[こちら](#)で受け付けております。

何かご不明な点がありましたら、こちらのメールアドレスyayoi.renraku@gmail.comまでご一報よろしくお願ひします。

平成二十六年 ひぐらしの音が静かに秋の訪れを知らせてきた 八月の終わり

神無月やよい

---

翻訳した人について



神奈川県在住。

趣味は読書と散歩。

生態は、主に右側を好んでのんびり泳いでいる。三日坊主な性格なので、ブログやツイッターは滅多に更新しない。

去年から自作小説をネットで公開し始め、現在は自サイトをのんびり運営中。

サイトが気になった方はこちらからどうぞ→[神無月やよい作品集～文字が織りなす物語～](#)

## モンスター家族にならないために

---

人間はお母さんのお腹からおんぎゃーと産声をあげ、産まれた瞬間から、犬や豚でもない【人間】として生まれてくる。

【人間】と名前のついた生き物は、犬や豚などの畜生（動物）とは、最初から全く違う。

世間が言うには、人間とは万物の霊にして、産まれた瞬間から種類が違う。

貴族など階級の区別はあるが、仕事にはそのような区別はあってはならない。

人間からエサを与えられ、お腹をぽんぽんに膨らませ、天気の良い日は外を駆けまわる。

兄弟でじゃれてかみ合い、疲れたらお昼寝する。

これは犬や豚が生きていく様子にして、とても簡単で単純な生きざまだ。

しかし、人間はこう単純にはいかない。

世間に貢献する為に働いている仕事は、とても複雑な事情が入り混じっている。

まず、第一に自分を大事にして、健康でいること。

次に二つ目として、世渡り上手な生き方を探しつつ、食う・寝る・着る。に不自由ない安全な人生を送る事。

三つ目は、結婚して子供を作り、成人させる事。

これは「ご飯さえ与えていけばよい」という訳ではない。

人間としての生き方を両親が教え、子供が成人した際に子育てなど困らぬよう、人間としての尊厳や社会での生活を教えるがもっとも重要だ。

四つ目は、人間が集まれば、やがて国となり、一つの社会が出来上がる。

お互いに公共の発展を考え、行動に移し、安全な社会と幸福に満ちた世間を求め続ける事だ。

この四つの心得を忘れずに、そして一度きりの人生を謳歌する為に趣味を持ち、楽しむといいだろう。

では、ハッピーライフとは何か？

考えてみよう。

丸いお月様を眺め、団子食うも良いだろう。

桜の木の下で花見したり、音楽を聴いてダンスするのもいい。

それ以外にも、他人に迷惑かけない趣味ならば<sup>ごらく</sup>娯楽と考えていいだろう。

これらは心身をリフレッシュさせるのに、とても重要で必要な事だ。

仕事が休みの日は積極的に取り入れたほうがいい。

むしろ楽しんで休んでしまうのを第五の仕事と心得てしまおう。

先ほど述べた五つの条件は、社会の一員として自覚のある人間が必ず行うべき仕事だ。

これさえ、十分に行っていれば、社会人として<sup>は</sup>なんら恥じる事はない。

しかし、今の時代でこの条件をクリアするのは、ちょっと厳しいかもしれない。

だから、なるべくそういう生活を送れるよう心掛けたいものである。

私が日頃から、口酸っぱく教えている【教育】とは、すなわちこの生き方が出来やすいようにア

ドバイスしているに過ぎない。

教育の定義は突き詰めて考えていくと非常に奥が深い。

単純に文字の読み書きを教えれば良い。というものではないからだ。

文字の読み書きはただの一部分に過ぎない。

教育分野は非常に多岐に及んでいる。

もっと言えば、人々が生まれ持っている能力を発達させて、より仕事がやりやすいよう進化していく事こそ、教育の本質といえるだろう。

人間が持つ天性の才能は、いわば土の中に埋まっている種のようなものだ。

ならば、いずれ芽が出るのは至極、当然の現象といえる。

しかし、その芽が出てすすくと順調に成長するかどうかは、こまめに手入れするかどうかで変わってくる。

すなわち、手入れの良し悪しが深く、その成長に影響を及ぼす。といっても過言ではない。

教育というものは、その人が持つ能力を育てる事であり、人間として生を受けてから、大人になるまで。

両親の言動によって育てられ、もしくは学校の先生によって導かれ、

あるいは世間を騒がせた事件に誘導され、その時々<sup>に</sup>流行した文化の影響を受けて人格は形成されていく。

性格の良し悪しともいうべき、出来・不出来はこれら教育の成果によって決定される。

とりわけ子供時代に見聞きして、習慣となった事柄は心の奥深くに染みこみ、たやすく<sup>きょうせい</sup> 矯正 する事が出来ない。

ならばこそ、習慣は第二の素質といってもいい。

【三つ子の<sup>たましい</sup> 魂 百まで】のことわざ通り、人間の価値とは、まさに両親の家庭教育次第とも言える。

だからこそ、両親は子供に対して、軽はずみな言動をとらないように日頃から気をつけたい。

ところが最近の世間における父母をみると、どうだろう？

昔は我が子に教育を行う。いわゆる<sup>じゅく</sup> 塾 やピアノといった習い事などさせたことがない。

それはひとえに家庭教育の重要性を知らず、また単純なものと認識しているからだ。

また、その時々<sup>の</sup>気分次第のでまかせで子供に接している事も多い。

ありきたりな例を一つ挙げよう。

子供が水たまりの中で転び、泥んこになって家に帰ってきたとする。

「何やってるんだ！」

大抵の母親はそのように厳しく子供をしかるだろう。

しかし、家の柱にぶつかってたんこぶを作って泣けば、どうだろうか？

おでこをさすって「いたいの、いたいの。遠くの山へ飛んでいけ〜！」と声をかける。

最後には「こんな所に柱があるほうが悪い！」と怒り、べしんと柱を<sup>たた</sup>叩いて子供を<sup>なぐさ</sup>慰める。

さて、この二つの違いは、子供にしてみれば、いずれも自分が原因で招いた事故である事実はな

んら変わらない。

しかし、泥まみれになれば怒られ、たんこぶを作ったらなぐさ慰められた。

違いはなんなのか？

結局の所、親には大して深い考えはない。

ただ一時の感情から発した言葉に過ぎない。

なぜなら、服を汚した場合は、母親からみると洗濯する手間を増やされたのだ。

余計な手間かけさせやがって！

そのような感情から、特段深い考えもなく、ただ感情のままに子供を怒鳴りつけた。

しかし、柱にぶつかりたんこぶを作った場合は、母親自身がぶつかった訳ではない。

自身は全く痛くない上に、掃除するような手間もない。

ただ、泣き叫んでやかましい。

静かにして欲しいから、柱に責任転嫁して子供をなぐさ慰めたのだ。

両親の行いは良くも悪くも、ちょっとした対応が子供の手本となり、教えとなる。

たとえ両親にそれほど深い考えがないにせよ、関わり方を突き詰めて考えてみると、他人を怒らせるツボの手本となっている。

さらに言えば、柱にぶつけた場合は、何かあれば他人のせいにして、自分をかえり省みなくてよい。

むやみに逆恨みの念を教える事になり、全くありがたくない教育方針とも言えるだろう。

他にもしか叱る場面についてだが、両親の気分次第でその度合いも変わってくる。

説教する必要があるのに、機嫌が良い時は見過ごし、あまつさえ良かったな。と褒める。ほ

給料日前などの機嫌が悪い時は、子供が百点を取って帰ってきたにも関わらず、「約束したおもちゃを買わなきゃいけないじゃないか！」と逆ギレする。

このような理不尽な扱いは少なくない。

そのような両親は大抵、教育＝文字の読み書きが出来ればよい。と考えている。

それさえ学んでおけば、将来は立派な人間になるもの。と思い込み、自分達の言動には、それほど影響を与えないと軽んじている。

しかし、ちょっと考えれば分かるが、言動を教える事は本を読んで、教えるよりもっとずっと心の奥深くに刻みこまれる。

なので、子供への接した方は、絶対に軽く考えてはいけない。

結局の所、子供はいつまでも小さいままではない。いずれは成長して大人となり、社会の一員として働く人となる。

人間にとって必要な習慣を形成するのに、邪魔かそうでないかをよく考え、しつけをおこなうべきだ。

そうでなければ、いずれ母親から犬や豚などのようなモンスターが生まれてくるのは自明の理だ。じめいり

このような人の形をしたモンスターは、ただ安全な場所で高みの見物するだけなら、まるで珍獣をみるようで楽しいに違いない。

しかし社会に出てきた時は非常に迷惑だ。

万一にでも、当事者になった際は、対応にかなり頭を悩ませるだろうから困ったものである。

初出：明治九年十月 「家庭叢談 第九号」

## 原題『家庭習慣の教を論ず』

人間の腹より生まれ出でたるものは、犬にもあらずまた豕ぶたにもあらず、取りも直さず人間なり。

いやしくも人間と名の附く動物なれば、犬豕等の畜類とは自おのずから区別なかるべからず。世人が毎度いう通りに、まさしく人は万物の靈にして、生まれ落ちし始めより、種類も違い、階級かにも斯くまで区別のあることなれば、その仕事にもまた区別なかるべからず。

人に恵まれたる物を食らいて腹を太くし、あるいは駆けまわり、あるいは噛かみ合いて疲すなわるれば乃ち眠る。

これ犬豕が世を渡るの有様にして、いかにも簡易なりというべし。

されども人間が世に居て務むべきの仕事は、斯く簡易かなるものにあらず、随分数多くして入り込みたるものなり。

大略これを区別すれば、第一に一身を大切にして健康を保つこと。

第二に活計の道、渡世の法を求めて衣食住に不自由なく生涯を安全に送ること。

第三に子供を養育して一人前の男女となし、二代目の世の中にては、その子の父母となるに

差支さしつかえなきように仕込むことなり。

第四に人々相集まりて一国一社会を成し、互いに公利はかを謀り共益を起し、力の及ぶだけを尽してその社会の安全幸福を求むること。

この四ヶ条の仕事をよくして十分に快樂を覚ゆるは論まを俟たずといえども、今また別に求むべきの快樂あり。

その快樂とは何ぞや。

月見なり、花見なり、音楽舞踏なり、そのほか総て世の中の妨げたのとならざるたの楽しみ事は、いずれも皆心身の活力を引立つるために甚だ緊要のものなれば、仕事いとまの暇あらば折を以て求むべきことなり。

これを第五の仕事とすべし。

右の五ヶ条は、いやしくも人間と名の附く動物にして社会の一部分を務むるものは、必ずともに行うべき仕事なり。

この仕事をさえ充分に成し得れば、人間社会の一人たるに恥むつずることなかるべし。

然りといえども今の文明の有様にては、充分を希望するはとても六ヶしきことなれば、

必ずしも充分にあらずとも、なるべきだけ充分に近づくことの出来るよう、精々注意せいぜいせざるべからず。

余輩つねが毎に勧むる所の教育とは、即ちこの有様に近づき得るの力を強くするの道にほかならざるなり。

故に一口に教育と呼びな做せども、その領分はなかなか広きものにて、ただに読み書きを教うるのみを以て教育とは申し難し。

読み書きの如きはただ教育の一部分なるのみ。



実に教育の箇条は、前号にも述べたる如く極めて多端なりといえども、早くいえば、人々が天然自然に稟<sup>う</sup>け得たる能力を発達して、人間急務<sup>しと</sup>の仕事<sup>しと</sup>を仕<sup>しと</sup>遂げ得るの力を強くすることなり。その天稟<sup>てんびん</sup>の能力なるものは、あたかも土の中に埋れる種<sup>いつか</sup>の如く、早晚<sup>いつか</sup>萌芽<sup>いだ</sup>を出すの性質は天然自然に備<sup>よ</sup>えたるものなり。

されども能くその萌芽<sup>よ</sup>を出して立派<sup>しか</sup>に生長すると否<sup>しか</sup>らざるとは、単に手入れの行届くと行届かざるとに依<sup>よ</sup>るなり。

即ち培養<sup>ていれ</sup>の厚薄良否に依るといふも可なり。

いわゆる教育なるものは、則<sup>すなわ</sup>ち能力の培養にして、人始めて生まれ落ちしより成人に及ぶまで、父母の言行によって養われ、あるいは学校の教授によって導かれ、あるいは世の有様<sup>いざな</sup>に誘われ、世俗<sup>さら</sup>の空気に暴<sup>さら</sup>されて、それ相応<sup>と</sup>に萌芽<sup>と</sup>を出し生長を遂<sup>と</sup>ぐるものなれば、その出来不出来は、その培養たる教育の良否によって定まることなり。

就中<sup>なかならず</sup> 幼少の時、見習い聞き覚えて習慣となりたることは、深く染み込めて容易<sup>た</sup>に矯め直しの出来ぬものなり。

さればこそ習慣は第二の天性を成すといひ、幼稚の性質は百歳までともいう程のことにて、真<sup>まこと</sup>に人の賢不肖<sup>けんふしょう</sup>は、父母家庭の教育次第なりといふも可なり。

家庭の教育、謹<sup>つつし</sup>むべきなり。

然<sup>しか</sup>るに今、この大切なる仕事を引受けたる世間の父母を見るに、かつて子を家庭に教育するの道を稽古<sup>つね</sup>したることなく、甚だしきは家庭教育の大切なることだに知らずして甚だ容易なるものと心得、毎に心の向き次第、その時その時の出任せにて所置<sup>しよち</sup>するもの多きが如し。

今その最も普通なる実例の一、二を示さんに、子供が誤って溝中<sup>みぞなか</sup>に落込み着物を汚すことあれば、厳しくその子を叱ることあり。

もしまた誤って柱<sup>ひたい</sup>に行き当り額<sup>こぶ</sup>に瘤<sup>しよち</sup>を出して泣き出すことあれば、これを叱らずしてかえって過ちを柱に帰し、柱を打ち叩きて子供を慰むることあり。

さてこの二つの場合において、子供の方にてはいずれも自身の誤りなれば頓<sup>とん</sup>と区別はなきことなれども、一には叱られ一には慰めらるるとはそもそも何故<sup>なにゆえ</sup>なるか。

畢竟<sup>ひっきょう</sup> 親の方にては格別深き考えもあらず、ただ一時の情意に発したるものなるべし。

その第一例なる衣裳<sup>ふんぬ</sup>を汚したる方は、何ほどか母に面倒を掛けあるいは損害を蒙<sup>こうむ</sup>らしむることあれば、憤怒の情に堪えかねて前後の考えもなく覚え<sup>たとい</sup>ず知らず叱り附くることならん。

また第二の方は、さまで面倒もなく損害もなき故、何となく子供の痛みを憐れみ、かつは泣声<sup>なみ</sup>の喧<sup>やかま</sup>しきを厭<sup>いと</sup>い、これを避けんがために過ちを柱に帰して暫<sup>しばら</sup>くこれを慰むることならんといえ

ども、父母のすることなすことは、善きも悪しきも皆一々子供の手本となり教えとなることなれば、縦令<sup>たとい</sup>父母には深き考えなきにもせよ、よくよくその係り合いを尋ぬれば、一は怒りの情に堪えきらざる手本になり、一は誤りを他<sup>かぶ</sup>に被せて自ら省みず、むやみに復讐の気合いを教え込むものにて、至極有り難からぬ教育なり。

そのほか叱るべきことあるも父母のきむき氣向次第にて、機嫌ほの善き時なればかえってこれを賞め、機嫌あ悪しければあるいはこれを叱る等の不都合は甚だすく尠なからず。

全体これらの父母たるものが、教育といえはただ字を教え、読み書きのけいこ稽古をのみするものと心得、その事をほどよさえ程能く教え込むときは立派な人間になるべしと思ひ、自身のふるまい拳動にはさほど心を用いざるものの如し。

されども少しく考え見るときは、身の拳動にて教うることは書を読みなわざりて教うるよりも深く心の底に染み込むものにて、かえって大切なる教育なれば、自身の所業は決して等閑えきにすべからず。

つまる処、子供とて何時いつまでも子供にあらず、直じきに一人前の男女となり、世の中の一部分を働くべき人間となるべきものなれば、事の大小軽重を問わず、人間必要の習慣を成すに益あるか妨げあるかを考え合せて、然る後に手を下すべきのみ。

然らずんば、人間の腹けんしより出でたる犬豕ひつじょうを生ずること 必定 なり。

かか斯る化物ばけものは街道に連れ出して見世物となすには至極面白かるべけれども、世の中のためには甚だ困りものなり。

初出：明治九年十月 「家庭叢談 第九号」



### 福沢諭吉

江戸 天保五年一月十日生まれー明治三十四年二月三日没（満六十六歳）

死ぬまで奥さんだけを愛し、九人の子沢山な家庭を築いた。

少子化？ 何それ？ な大家族パパ。

日本で知らない人はいない。それほど知名度が高い人物。

多分、彼が嫌い！という人は、そんなにいないのでは……？

彼を描いた紙幣を多く持つのが、世間でのステータスと認められる事から、詐欺や殺人など犯罪に走る人が今も絶えない。

時には、彼を巡って親族間で、争いが発生する事もしばしばである……。

「俺、<sup>おれ</sup>モテすぎてつらいわ〜」

あの世でお弟子さん達にそうぼやいているとか、いないとか？

福沢氏は、江戸～明治のまさに歴史の転換期を生きた教育者です。

武芸の達人でしたが、そちらよりも他人に教える事に喜びを見出した方です。

ユーモアたっぷりな人柄で、教えるのが上手い。そう、ちまたで評判だったのを江戸幕府が聞き、ヘッドハンティングを行い、専用の塾を開きます。

これが後の慶応義塾大学となります。

子供時代は、神社のご神体をその辺に落ちてる石とすり変えてみたり……かなりやんちゃで、恐れ知らずな性格でもあったようです。

散髪が嫌いで酒好きな性格でもあったらしく、困った母親が「散髪終わった後、酒を飲ませてやろう」そう取引を持ちかけたエピソードもあります。

苦肉の策だったのでしょうが、まだ内臓器官が発達していない子供にアルコール与えるお母さんも十分、柔らかい思考の持ち主です……。

続いて、このお話が発表された時代背景を紹介します。

じゃないと、あまりの前時代っぷりに『石器時代か！？』とツッコミ入れたくなりますので……。

まず、幕末当時は、現在のような年中無休。二十四時間営業のコンビニやスーパーはありません。

江戸や大阪など、その他地方のお城の城下町を中心に栄えています。

コンビニがない代わりに、今で言う百円の回転寿司や吉野屋のようなファーストフード系（マクドナルドやケンタッキーはないです）の外食産業が結構、繁盛しています。

にぎり寿司一貫がおにぎり大サイズで、お値段百円ぐらいで食べられました。男性は自炊せずとも困らなかったようですね。

我が世の春とばかりに二百五十年以上、平和を楽しんでいた江戸時代ですが、かの有名なペリーさんが黒船に乗ってやってきます。

幕府はのらりくらりとアメリカの要求を交わし続けましたが、いよいよ逃げ切れない！

そう限界を感じて、限定的に鎖国を解除させますが、あとは学校で習った通りです。

「俺、社長！ お前、<sup>おれ</sup>奴隷な？」

そう言わんばかりのジャイアン条約（日米修好通商条約）をアメリカが要求してきます。

これに危機を感じて、立ち上がったのが、武士の人達です

『幕府の連中、脳みそが腐ってやがる。平和が長すぎたんだ……』

そんな思いを抱いたかは知る由がありませんが、国を思う人達が幕府を歴史の表舞台からひきずりおろし、諸外国に対抗できるよう急ぎ、明治政府を立ち上げました。

このお話は、ヨーロッパやアメリカを見習え！GO！GO！

急速に外国の文化を取り入れ、そう国民に広めているスローガンでもあるようです。

余談ですが、この発表から二十年後。

時の明治天皇陛下が、二千年の歴史ある日本文化の衰退を心配なさり、ある方針を政府通じて、発表なさいます。

知る人ぞ知る。あの【<sup>きょういくちよくご</sup>教育勅語】です。

私のオススメは口語訳がとてもしっかりやすかった杉浦重剛氏著書の【昭和天皇の学ばれた<sup>きょういくちよくご</sup>教育勅語】です。

ご興味ある方はぜひ、図書館などで借りたり、書店で取り寄せてみて下さい。

以上で、当時の時代背景など説明を終わります。